



Title	「紙漉き」を通して地域の自然と文化を学ぶ体験学習： 高校生を対象とした宮古島市における実践報告
Author(s)	仲間, 伸恵
Citation	琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 = Bulletin of Faculty of Education Center for Educational Research and Development(23): 91-97
Issue Date	2016-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35528
Rights	

「紙漉き」を通して地域の自然と文化を学ぶ体験学習

—高校生を対象とした宮古島市における実践報告—

仲間 伸恵*

**Learning about the nature and culture of a region through
manual papermaking practice**

Practice report on a project with Miyakojima senior-high school students

Nobue Nakama*

要約

沖縄県立宮古工業高校生活情報科からの依頼を受け、平成27年1月14日に同校にて服飾デザインコースの2、3年生を対象に紙漉き体験学習を実践する機会を得た。国の重要無形文化財・宮古上布を有する宮古地域の高校生を対象にした今回の体験学習は、宮古上布の原料でもある苧麻で紙を漉くことを体験しながら、ものづくりの喜びを感じるとともに地域の自然や生活文化に興味を持ち、理解を深める契機になることをねらいとして行った。参加した生徒たちの反応には、身近な植物から紙ができることへの驚きと、苧麻という植物から繊維をとり出し美しい糸をつくる島の伝統の手技に対する新鮮な興味が見受けられた。

1. はじめに

沖縄県は、亜熱帯の美しい自然環境の中、独特の豊かな生活文化や伝統工芸を育んできた土地である。それらの素晴らしい工芸技術や手技の数々をこれから先も未来へと受け継いでいくことができるのだろうか。正直なところ、大変心配な状況だと言わざるをえない。

地域で育まれてきた生活の文化は、地域の人々の関心が無くなることで本当の意味で失われていくのだろう。

学校教育・社会教育の場で、固有の文化や自然環境の大切な部分を地域の子どもたちへ伝える取組みは、今後ますます重要になってくる。

日々生活している身近な自然の中から素材を見つけ、それを使って創作活動をしながらか地域の文化を学んでいくという仕組みがつかれないだろうか。その方法として、「紙漉き」を通して地域の自然と文化を学ぶ体験学習を考えている。

本稿では、平成27年1月14日に沖縄県立宮古工業高校生活情報科服飾デザインコースにおいて行った「苧麻」を素材にした紙漉き体験学習について報告するとともに、宮古島における苧麻紙漉き体験学習の現状を紹介する。

2. 沖縄県立宮古工業高校生活情報科での実践

沖縄県立宮古工業高校生活情報科服飾デザインコースでは、家庭科の衣生活分野について、講義・実

* 琉球大学教育学部美術教育教室

習を通して知識と技術の習得に努めているが、宮古上布の織り手を講師に迎えた宮古織りや染色の授業も行われており、地元宮古の伝統継承への意識も高い。

同校からの「苧麻紙の紙漉き講習会を行いたい」との依頼により、今回の苧麻紙漉き体験学習が実現することになった。豊かな生活文化や伝統工芸を学びながら自ら創造する体験を持つことで、作り出す喜びを味わうとともに郷土の文化への関心と理解を育むことを目的とし、服飾デザインコースの2年生と3年生、合計10名（全員女子）が参加して行われた。

今回、紙漉き道具のはほとんどは、宮古島市総合博物館からお借りした。宮古島市総合博物館では10年程前から博物館講座や子ども博物館などの活動において苧麻紙漉き体験を行っており、簡単な紙漉きに必要な道具類が整えられている。

可能であるなら、自然素材を十分に体感するためには植物を自分で採集するところから体験してもらいたいところであるが、今回は実施時間の関係上、苧麻紙の原料（紙料）はあらかじめ大学の研究室にて用意した。

実施概要

苧麻紙漉き講習会（宮古工業高校 生活情報科 服飾デザインコース）	
目的	豊かな伝統工芸や生活文化を学びながら自ら創造する体験を持つことで、作り出す喜びを味わうとともに郷土の文化への関心と理解を育む。
日時	平成27年1月14日（水） 4・5・6校時（12時55分～15時45分）
場所	宮古工業高校 生活情報科棟 デザイン実習室
参加生徒	生活情報科 服飾デザインコース 2・3年生（10名）
事前準備	<ul style="list-style-type: none"> ・原料（紙料）とネリの準備 苧麻繊維220gから紙料をつくる。白（黒皮無し）と茶色（黒皮あり）の2種用意。ネリは化学ネリを使用。 ・紙に関する資料の用意 世界の紙等（羊皮紙、パピルス紙、インドやネパールの紙など） 日本の紙（楮紙、三桎紙、雁皮紙、その他いろいろな素材や技法の紙） 沖縄の身近な植物で漉いた紙 ・苧麻手績み糸、宮古上布（苧麻布）見本裂用意 ・苧麻紙漉き工程説明用資料の用意 苧麻の繊維見本、紙料づくり各工程ごとの原料見本等 ・当日のブー引き体験用苧麻（生）の入手手配 神里佐千子氏の苧麻畑から、生徒全員が体験できる本数を提供してもらう。 当日朝に刈り取る予定。ブー引き用ミミガイを用意する。 ・道具の手配、用意（別表参照） 必要道具のリストを提供し、一部は高校側から宮古島市総合博物館へ借用依頼。他は適宜用意。

紙漉き体験のために用意するものリスト

宮古島市総合博物館より借用するもの

衣装ケース 4点	紙原料と水を入れて漉き舟として使用
漉き枠：はがきサイズ 8点 A4サイズ 2点 B5サイズ 2点 B4サイズ 2点	
ベニヤ板：90×60cm 10枚 90×45cm 10枚	干し板として使用
スポンジローラー 3個	漉いた紙を干し板に貼り付ける時に使用

その他 用意するもの

タオル 5～6枚程度	漉いた紙を漉き枠から干し板に移す作業の際に使用。 古いもので良い。
バケツ・ボール 2～3個	衣装ケースに水を入れたり、紙の原料を入れておく ために使用。
ザル	片付けのとき、残った原料を濾しとる際に使用。
アイロン	紙を急いで乾かしたいときのため用意。 (時間があれば天日干ししてもよい)
延長コード	アイロンを使うときのため。
古新聞紙	アイロンの当て紙などに。
付箋・鉛筆	誰の紙かわかるように漉いた紙に名前を添える用に。

当日の実施内容

4校時 13:00～13:45	<p>【いろいろな手漉きの紙について学ぶ。苧麻紙について学ぶ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・羊皮紙やパピルス紙などから人が紙を作りだした歴史について話を する。 ・原料や技法、産地などの異なる様々な種類の手漉き紙のサンプルを 実際に触ってみながら、手漉き紙への興味を呼び起こし、紙に関する 基本的な知識を学ぶ。 ・苧麻の紙に触れ、宮古上布との関連についてなどを学ぶ。 ・苧麻紙漉きについて、原料植物の苧麻から繊維をとり苧麻紙が できるまでの工程の説明を受ける。 ・苧麻の茎から繊維をとる体験をする。(この作業は宮古上布原料糸 製作時のブー引き工程と共通)
5・6校時 13:55～14:45 14:55～15:45	<p>【苧麻紙を漉く】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ用意された苧麻の紙料を使い、簡単な紙漉き道具を用 いて、ハガキからB4サイズまでの紙を漉く。 ・漉いた紙を板に貼り付けて干し、乾燥させて紙ができあがるま でを体験する。 ・今日の体験を振り返り、感想を述べ合う

りたい。

- ・初めての体験で、ワクワクして難しい作業もあったけど、先生が優しく教えてくれて、友達とも楽しくできたので良かったです。
- ・糸にするのもやってみたい。
- ・初めての体験でちゃんとできるか不安だったけど、講師の先生が分かりやすく説明してくれたお陰で貴重な体験ができました。
- ・初めて紙を作る体験ができて良かったです。わざわざ来てくださりありがとうございました。
- ・水のきり方とか簡単に思っているけど、実際は難しかったです。とても楽しくできて良かったです。
- ・紙漉きをやるのは2回目だったけど、とても楽しくできて良かったです。

成果と課題

実施後にいただいたアンケートの中で、宮古上布の仕組み苧麻糸への関心が伺える記述が多いことは、うれしい驚きであった。宮古の糸づくりの独特な方法であるミミガイの貝殻を使った繊維の取り方に興味を持った様子や、「糸にするのもやってみたい」と述べたり「苧麻の栽培から紙と糸になる工程」に関心を示していることなど、予想以上に糸づくりの工程に関心を持ってくれることが分かった。

服飾デザインコースでは、3年生の「服飾文化」の中で宮古織り、染色の授業を行っているが、使用する糸は宮古の仕組み苧麻糸ではなく紡績糸を使っている。宮古上布製作者にとってもかなり貴重な存在となっている仕組み苧麻糸を授業で使うことは現実的に困難であるだけに、このような体験学習によって、地元の誇る仕組み糸の素晴らしさ、宮古島が生み出す苧麻という素材の魅力を体感し理解する機会を提供することができるのではないだろうか。

今後は、宮古上布・宮古の織物・苧麻紙に関するテキストを作成するなど資料をさらに充実させて身近に感じてもらい、高校生なりに宮古の織物文化に対するイメージを広げられるような工夫をしたい。さらに苧麻紙に関しても、漉いた紙で何をするかなど出来るだけ生徒たちの自由な発想を活かしていきけるような展開を工夫していきたいと考えている。

3. なぜ、紙を漉きながら宮古の織物文化を教えようとするのか。

苧麻紙について

宮古上布の原料糸となる「苧麻」は、イラクサ科の多年草で、別名カラムシともいう。方言で「ブー」と呼ばれている苧麻は、宮古では野生のものがいたるところに見られるが、宮古上布の糸をつくるためにはひとの手で大切に育て、年に数回刈り取って繊維をとりだす。細くて強く透明感のある美しい植物繊維である。

現在、和紙の原料としては、楮、三桠、雁皮の三種類が一般的であるが、紀元前100年ごろの中国の遺跡から発見された世界で一番古い紙だといわれている紙は麻の紙である。日本でも楮や三桠の紙が使われるようになるまで、大麻や苧麻を原料とした麻紙（まし・あさがみ）が使われており、東大寺正倉院には奈良時代に書かれた麻紙の古文書が今も残っている。宮古島で織られている「宮古上布」の糸の原料にもなる苧麻は、立派な紙の原料にもなる植物なのである。

沖縄の紙抄造史は17世紀に楮紙の一種である杉原紙や百田紙の紙漉きから始まり、18世紀から19世紀にかけて芭蕉紙をはじめとする琉球紙の紙漉き技術が琉球全域に広がっていった。宮古島の紙漉きに関する資料は多くないが、ここでも芭蕉紙や杉原紙・百田紙が漉かれていたようである。いつ頃やめてしまったかは定かではない。苧麻で紙を漉いていたという記録は見られ無い。

平成15年頃、宮古上布に従事している人たちの中から、栽培している苧麻のうちで糸として使われ

ない分を使って紙をつくろうという動きがおこり苧麻紙が漉かれ始める。宮古苧麻紙の誕生はその始めから宮古上布と繋がっていたのである。

宮古上布について

宮古の人々が、いつ頃どのようにして布を織る技術を得たのか定かではないが、14世紀の史料に、その頃すでに宮古の人々が布を織る技術や染める技術を持っていたことをうかがわせる記述をみることができる。それから現在まで、「織る」という文化が受け継がれてきた。なかでも苧麻から糸を績み精緻な手技で織り上げる「宮古上布」の技術は、国の重要無形文化財に指定されている。

しかし、今、宮古島で暮らしていても宮古上布に触れる機会はなかなか無い。島の大切な伝統文化である宮古上布・宮古の織物の継承が危ぶまれるようになって久しいが、目にする機会も触れる機会もないのであれば、人々の関心を失い忘れられていくのは当然のことと言わなければならないだろう。外からの評価がいかに高くても、地域の文化はその担い手である地域の人々の生活の中になければいつか失われてしまうことになる。

宮古島の自慢のひとつである「宮古上布・宮古の織物」が、これからも島のみんなの自慢であるために、どうしたらいいか、難しいチャレンジが続けられている。

紙漉き体験学習に期待すること

宮古上布に代表される宮古の織物は、かつて宮古の暮らしを支えた貴重な生活文化である。精巧になり高級品として評価される一方で島の日常から離れてしまったものづくりの伝統を「紙漉き」という体験を通して、子どもたちの身近に引き寄せる機会を提供できないだろうか。自分たちの文化を学び、それに誇りを持つことは、長い時間積み重なってきた歴史のつながりのなかに自分もいるという感覚を養い、子どもたちの人間形成・自己確立に大きな影響を及ぼし、未来へ生きていく力になるのではないだろうか。

4. 宮古地域における近年の紙漉き体験活動の状況

宮古島市総合博物館では子ども博物館事業の中や展覧会関連ワークショップ、博物館講座など多くの機会に苧麻紙漉き体験講座を開催している。また、福嶺小学校や北小学校、久松中学校では苧麻紙の卒業証書や感謝状づくりが行われた。市民文化祭やその他のイベントでも苧麻紙漉き体験会が開かれ、少しずつ関心が寄せられてきている。宮古島市でも2014年5月に完成し宮古織物事業協同組合の拠点となっている新しい伝統工芸品センターに紙漉き室を備えるなど、苧麻紙に対する意欲を示している。

宮古島市立福嶺小学校では、昨年宮古苧麻績み保存会会員のサポートを受けながら、校内に苧麻を育て、その繊維を採り、紙漉きの練習をして、6年生は最後に苧麻紙の卒業証書をつくるという活動をはじめている。この活動の重要なポイントは活動の中で子どもたちと苧麻績み保存会のメンバー（多くは糸績み熟練者のおばあち）との交流が生まれるところにある。体験学習の中で、伝統工芸に携わっている人や地域の方々の協力を得て交流を持つことで、印象的な学びの場がつけられ、人のつながりの中で地域の文化が次の世代へと自然に伝えられていくことを期待している。

この活動は、子どもたちが「苧麻」に触れながら、宮古の歴史や自然環境、生活文化や素晴らしい手仕事について学ぶとともに、豊かな創造力を育むことを目指している。このような活動が継続的に行われていくには何が必要か検討し、その仕組みをつくるのが今後の大きな課題である。まずは、学校、教育委員会、父兄など地域の方々、博物館、伝統文化の担い手（糸績み保存会、織物組合、上布保存会など）、紙漉き技術者などのネットワークの構築を目指したい。

5. 「紙漉き」を通して地域の自然と文化を学ぶ体験学習の可能性

身近な植物から始まる「紙漉き」を通して地域の自然と文化を学ぶ体験学習は、苧麻と宮古上布の組み合わせに限るものではない。各地の自然環境や生活文化と深く関わってきた他の植物素材にも広がる可能性を持っている。

目指すことは、まず、身近な自然の中に存在する素材の魅力を発見し五感を使って自然素材と向き合いながら、自分の手で「作り出す」経験をすることであり、この地で脈々と育まれてきた文化を、今を生きるリアルな自分につながるものとして感じることである。

時代の変化の中で、必然的に人々の生活スタイルも変わっていくだろうが、その地で育まれてきた文化の大切な部分は、これからを生きる人々の足元を固める大事な力になるであろう。

謝辞

宮古島の高校生に対する苧麻紙漉き体験学習会実践の貴重な機会を与えてくださった宮古工業高校生活情報科の宮国律子先生と、同校服飾デザインコースで宮古織り・染色の講師をされており、筆者の宮古上布の師匠でもある神里佐千子さんに、心からの感謝を申し上げます。

参考文献

小宮英俊、紙の文化誌、丸善株式会社、1992

阿部栄四郎、豊平良顯、柳橋眞、上江洲敏夫、勝公彦、沖縄の紙、沖縄タイムス社、1982

粟国恭子監修、沖縄の紙を考える会編、沖縄文化・工芸研究所、2004

砂川玄正、宮古の織物、宮古島市総合博物館、1998